

月刊 **みんぱく**

9月号

2025

特集 **舟だ! タカラだ!**

巻頭エッセイ 山船 晃太郎

船を考古学する

やまふね こうたろう
山船晃太郎

船舶考古学者

プロフィール

1984年生まれ。テキサスA&M大学大学院にて博士号を取得。西洋船(古代・中世・近代)を主たる研究対象とする考古学と歴史学のほか、水中文化遺産の3次元測量を専門とする。現在、世界各国のさまざまな研究機関から依頼を受け、水中遺跡の発掘調査や学術研究の支援をおこなっている。合同会社アパラティス代表社員。京都橘大学客員教授。

人

類は筏や丸木舟を使って海を渡り、大陸から島々へと居住域を広げ、やがて帆船や蒸気船によって国家間の物流や軍事行動をおこなってきた。人の歴史を語る上で、船という存在を抜きにすることはできない。

一九六〇年代に地中海で始まった水中発掘を契機に、水中考古学という分野が注目されるようになった。海底で土砂に埋まった無酸素環境では、有機物ですら数千年にわたって保存されることがあるため、陸上では得られない考古資料が多く見つかる。この水中考古学の中でも、「船」に特化して研究をおこなう分野が「船舶考古学」である。

沈没船の研究では、船を単なる構造物としてだけでなく、当時の社会や経済、技術を反映した複合的な存在として捉え、①船体構造(テクニカル)、②積荷や武装(ファンクショナル)、③乗組員の私物や食料(ソーシャル)など、三つの視点から分析をおこなう。また、船の運用目的(輸送・軍事・漁業・祭儀など)や、運用環境(外洋・沿岸・河川・湖)も併せて検討することで、発掘された船の「形状の目的」と「技術」すなわち「造船の伝統」が浮かび上がってくる。たとえば地中海文明や北欧の古代船は、外板を先に構築する「シユル・ファースト・コンストラクショ

ン」という方式で造られていた。その後、中世のビザンツ帝国で、骨組みを先に造る「スケルトン・ファースト・コンストラクション」へと進化し、事前に設計された形状の船を効率よく造ることが可能となった。ルネサンス期には数学や幾何学の応用によって造船設計はさらに高度化し、大航海時代の発展を支える技術となっていく。

一方、日本における船舶考古学の発展は、まだ始まったばかりである。これまで断片的に研究はおこなわれてきたが、陸上の考古学に比べると制度的な基盤は整っていなかった。だが近年、二〇一二年の元寇船(鷹島神崎遺跡)の国史跡指定や、二〇二二年に文化庁が発行した『水中遺跡ガイドブック』などの影響により、水中考古学への注目が国内でも高まってきている。

その中で私が個人的に注目しているのが、江戸時代の伝統的な輸送船である弁才船(北前船・菱垣廻船など)である。これらの船の発掘研究が進めば、日本独自の造船技術、江戸期の物流・経済システムや、そして商人や船乗りたちの暮らしぶりまでを明らかにできるだろう。沈没船から歴史を読み解く船舶考古学。この分野には、学術的な意義と同時に、人類と海との関わりを紐解くロマンがあふれている。

月刊 みんなの 2025年 9月号

表紙

カヌーの前でクラ交易で交換されるタカラをみせる村人。首飾りソウラヴァと両手に持つ腕輪ムフリ(ババアニューギニア アンブレット群島ウラン島、1970年、福本繁樹撮影)

*本文中、撮影者・提供者を記載していない写真は執筆者の撮影・提供によるものです。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

- 1 巻頭エッセイ
船を考古学する
山船 晃太郎

特集 舟だ！タカラだ！

- 2 舟のお宝グランドライン
小野 林太郎
- 4 島のタカラとアートの始原
福本 繁樹
- 6 船をつくり、タカラをつなぐ
明星 つきこ
- 8 黒曜石がブタになる！？
後藤 明
- 10 マンガ 収蔵庫で舟！舟！！舟ー!!!
大林 龍矢
- 12 みんなく回覧板

- 14 推しコレ図鑑
王母はささやく
井野瀬 久美恵
- 16 ふらりミュージアム
西アフリカ文化の美術と歴史博物館
池邊 智基
- 17 世界の「乗っちゃえ！」
アマゾンの長い船旅は始原に遡る
神崎 隼人
- 18 だって調査だもの
フィールドワークが始まらない？
浅田 直規
- 20 ばくっ！とフィルめし
わたしを支えたチョプスイ
大島 崇彰
- 21 今月号の地図・編集後記

右頁：貝のお宝を運ぶクラカヌーとお宝を身に着けた人びと
(パプアニューギニア トロブリアン諸島、2011年、門田修撮影)



お宝(ブタ)を皆で舟に乗せている風景
(パプアニューギニア ミルンバイ州、
2015年、門馬一平撮影)

特別展「舟と人類——アジア・オセアニアの海の暮らし」では、古くからわたしたちの身近にあったはずの舟に注目し、人類史的な視点もふまえて紹介する。ここでの「舟」は広義では水上の運搬具や乗り物、狭義には筏やカヌーなど比較的小型で素材の加工度がシンプルな乗り物のこと。構造船など材を組み合わせて大型化した乗り物は「船」とよんでいる。

お宝は海の向こうから

舟にまつわるイメージが多様ななか、本特集では「舟とお宝」について考えてみよう。古来より日本列島やオセアニアの島々には、お宝や豊穡は海の向こうから来るという信仰が存在してきた。琉球のニライカナイ信仰や日本の恵比寿信仰は好事例だ。五穀豊穡や商売繁盛の神様として有名な恵比須様



特集

舟だ！タカラだ！

特別展
舟と人類——アジア・オセアニアの海の暮らし

会期：2025年9月4日(木)～12月9日(火)

場所：特別展示館

最初の人とは舟で来た。
舟あってこそ人の営み。
カミも、情報も、モノも海からやって来る。
そしてタカラも。
しかし、タカラってなに？
さあ、タカラ探しに出帆しよう！

は、釣り竿と鯛を抱える姿からも、その源泉が海にあることは明らかだ。

海の向こうから来るお宝のうち、舟にちなむお宝について考えてみよう。オセアニアでは、ココヤシや黒曜石を舟で運び続けることで、数個のヤシや一塊の石が一頭のお宝に変わったり、特定の貝製品や土器がグルグルと島から島へと運ばれたりするなかで、人と人がつながる。インドネシアのスラウエシ島でも船によって人と人とながかり、そこに豊穡や成功がついてくる。舟そのものがお宝となることもある。映画「パイレーツ・オブ・カリビアン」で有名なジャック・スパロウ船長も、自分の船を獲得するのに大奮闘していたことを思い出す。

人類史のグランドライン

世界的な大ヒットとなった漫画『ONE PIECE』も海賊の話だ。しかし、その主題はお宝そのものより、ルフィたちの航海によって次々に生まれる人と人のつながりにあるようだ。いや、つながりこそがお宝なのだ。

なお、彼らが航海する偉大なる航路「グランドライン」は、世界を一周する航路である。それはわたしたちサピエンスが舟により南

舟のお宝 グランドライン

小野 林太郎
民博教授

ホモ・サピエンスは海を超え

舟と聞いて何を想像するだろうか？
海や川をイメージする人もいるだろうし、航海のもつ冒険やロマンというイメージをもつ人もいるだろう。あるいは舟が運ぶ物資、あるいは金銀財宝といったお宝を想像する人もいるかもしれない。

舟とはヒトやモノを乗せ、川や海といった水域を超える道具だ。その誕生は、人類史的にも、わたしたちホモ・サピエンス以降だともいわれてきた。海を超えて地球上のほぼ全域への拡散に成功したのは、わたしたちサピエンスのみである。そして車や飛行機といった近現代の乗り物が出現する以前、人類の水域を超えた移動や移住、さらには物流を長らく支えてきたのは舟であった。



海域アジア・オセアニアへのサピエンス拡散地図(2022年、国立民族学博物館作成)

太平洋の果てにあるハワイ諸島やイースター島へとたどり着き、世界各地の移住に成功した人類史におけるグランドラインにも重ねられそうだ。

舟とタカラの航海へ、いざ出航だ！



パンダナス布の貨幣 シゴ・ンガフガフル
全長約82メートル。アンパエ島に5種あるパンダナス布の貨幣のうちもっとも価値の高いもの。先端の約3メートルは棒締め染め技法により赤い文様が染められている。1982年の結婚式の婚資とされた（ヴァヌアツ アンパエ島、1982年収集、個人蔵）



羽毛貨 トアウ
完成した羽毛貨トアウをみせるメロボ氏、約300羽のミツスイの赤い羽毛が約10メートルの帯に貼りめぐらされている。撮影当時は3名が伝統の製作法を伝えていた（ソロモン諸島 サンタクルーズ諸島ネンド島、1973年）



ブタ牙
ヴァヌアツの国旗にもデザインされている伝統のタカラ。2回転したブタ牙はきわめて貴重である（ヴァヌアツ ヴァオ島産、1973年）



貝貨 タフリアエ
全長440センチメートル、約3万個の赤白黒の貝のビーズ、イルカ歯、堅果の殻などを10連に束ねている（ソロモン諸島 マライタ島西北部、1990年収集、個人蔵）

島のタカラとアートの始原

もったいぶって気前よく

オセアニアにはどの民族にも独自のタカラがある。タカラは、大きささまざまな貝を加工したもの、ブタ・イヌ・イルカ・クジラなどの歯、巨大なタパ（樹皮布）、長大なパンダナス布、赤い羽毛の帯などなど、地域や民族集団によって多種多様、それぞれ珍妙、奇想天外な造形である。

タカラは、私蔵するものではなく、儀礼的手続きによって贈与するもの、おもいつきり気前よく、もったいぶって村びとにふるまうものだ。ケチは軽蔑の対象となり、気前のよさは、ビッグマンとしての威信を獲得することになる。

どのタカラも、膨大な情熱と労力、高度な技術でつくられる伝統の品々で、美しく、洗練され、妙味がある。タカラはうやうやしく捧げ、かざし、展示するもので、多く（シェークスピア）といわれる人間が、自然や社会環境のなかで争いもほどほどにうまくやってゆくには、文化を用いた調整が必要だ。タカラをとりまく文化がその機能をはたしてきたのではないか。

ここで視点を中国に移すと、「寶(宝)・財・貨・幣」などの漢字は、元来のタカラを伝える。『新漢語林』（大修館書店）などによると、「寶」は屋根のなかに玉と缶（ほとぎ、土器）と貝が安置されているさまをあらわす。「幣」には「神に供えささげる布、贈り物、タカラ、貨幣」の意がある。貝はタカラを代表するものだった。貝を部首とする漢字の解説を見ると、「贈、賜、寶、貢、贄」などはタカラが贈り物であったこと、「賞、贄、貴、賀、賑、賢」などはタカラが威信を獲得する手段だったことを示す。そのことはオセアニアに伝えられてきたタカラの文化のありさまとも共通している。

タカラの文化 マネーの文化

オセアニアには、シエルマネー（貝貨）、フェザーマネー（サンタクルーズ諸島の羽毛貨）、マツトマネー（ヴァヌアツのパンダナス布の貨幣）などと、「マネー」とよばれるタカラがある。しかしタカラとマネーは似て非な

ふくもと しげき
福本 繁樹 美術家

は飾りや装身具にもなり、人びとから羨望・称賛・昂奮・敬愛をあつめる。タカラは衣食住の実用品からかけ離れた形状となり、人びとを夢中にさせ、社会を活気づける。そんなタカラは日常生活の「用」を旨とする民具というより、アート作品そのものではないか。

タカラのはじまり

オセアニアに近年まで伝えられてきたタカラの文化の様相は、われわれ自身の祖先の歴史においても早くから同様の文化が発達していただろうことを示唆する。初期のサピエンスがすでに集団で暮らしていた可能性も指摘されている。頭脳の発達した人びとが長きにわたって集団で危機をのりこえてきたのは、食料の確保や生活の知恵のせいだけではないだろう。「社会的（ボリス的）動物」（アリストテレス）、「感情の動物」



土器 ワエガ
7種ある土器の種類のうちのアイデデヤ。クラ交易によってマッシュム地方一帯に伝えられ、トロブリアンド島では婚資ともなる。最大径60センチメートル、高さ29センチメートル（ババニューギニア アンフレット群島ウラシ島産、1970年収集、個人蔵、来田猛撮影）



タバ(樹皮布) ガトゥ・ラウニマ
タバづくり専用の小屋に15名があつまり、一日がかりでガトゥ・ラウニマ(約5×30メートル)を構成した。トンガではタバのことをタカラを意味する「コロア」とよぶ(トンガ、1982年)

右頁:タナベルの海岸線に立ち並ぶバンティラン(造船所)(2022年)
(写真はすべてインドネシア 南スラウェシ)



船体の肋材(ろくざい)を加工する船大工(2022年)

ピニシをつくる船大工

ピニシをつくる船大工にとって、タカラは人とのつながりである。この大型船は、五〇〇人程度の船大工によって建造される。新しい注文が入ると、バンティランのブンガワ(棟梁)は、サウイとよばれる船大工を集める。彼らは数カ月、長いときは数年にわたり、バンティランでの造船作業に従事する。船が完成すると、大工たちは次の仕事を探して別のバンティランに移る。ときには地区を超えた県や州に出張大工と



「ピニシ」のふるさと

船は人やものを運ぶだけではない。船は人と人をつないできた。大スンダ列島のひとつであるインドネシア、スラウェシ島の南部は、エンジン(発動機)と帆を備えた木造機帆船「ピニシ」のふるさとだ。

ピニシは大きい。地域の島々をむすぶこの船は、現在は貨物船としてよりも観光船として使われることが多い。いずれにしても全長二〇〜三〇メートルほどある数百トン級の船だ。

南スラウェシ南東端のタナベル地区は、遠浅の海岸

して出かけることもある。

ブンガワにとつても、サウイにとつても、人とのつながりは重要だ。新規の注文はほとんどの場合、親戚や同業者らを介した「人の紹介」による。また、船大工を集めるときも「人とのつながり」で集める。ある棟梁は、一緒に働く大工が、「いとこ」「妻の弟」「姪の夫の知りあい」だと言う。ある大工たちからは、「知人に誘われてパパアに一年大型船をつくりに行った」とか、「一〇〇キロメートル離れた他県に毎年働きに行く」といった話を聞く。南スラウェシの船は、人と人とのつながりから生み出される。

機嫌よく働くこと

タナベルの造船現場では、もめごとや喧嘩は忌避される。新人大工がもたついても、少し不器用な大工がいても、彼らを責めたり、怒ったりはしない。船大工たちは、想定外のことがおこつても淡々と対処し、木を刻み、板材を組み、釘を打ち込み、船をつくっていく。

「気」は船に移る。現地のことばではハティといい、心を意味する。大工たちの「悪い気」が移ると、船は進水しなかったり、転覆したりするという。たしかに船づくりの

船をつくり、タカラをつなぐ

みょうじょう
明星つきこ

東洋大学 日本学術振興会 特別研究員PD

線にバンティランとよばれる造船所が立ち並ぶ。小型の漁船や運搬船もあるが、そのなかでもとりわけ大きなピニシは、間近で見ると、反り立つ壁のような迫力がある。



バンティランでの船づくり(2019年)

腕がいいことは重要であるが、それと同じくらい大事なことは「機嫌よく働くこと」である。現場の「良い気」が、良い船をつくるのだ。

このことは、人が人をつなぎ、新しい仕事を生み出す機会にもなる。モノは、重層的な社会関係の結晶だ。南スラウェシの船大工にとつては、人とのつながりこそがタカラである。タナベルのタカラが、今日も船をつくり出している。



船体の板材に墨付けをおこなう船大工(2022年)

黒曜石がブタになる!?

後藤 明^{ごとう あきら}

喜界島サンゴ礁科学研究所学術顧問

黒曜石の産地タラセア

パプア・ニューギニア国の東方海上に浮かぶ、ビスマルク諸島のニューブリテン島は九州とほぼ同じ面積をもつ島である。その中央部から北岸のウィラウメズ半島東岸のタラセア地方はオセアニアを代表する黒曜石の産地である。黒曜石の剥片は金属器が入るまで、利器、入れ墨彫り針、ひげ剃りなどに使われたほか、高度な剥離技術を用いて作られた尖頭器は象徴財としても扱われた。

火山の噴煙の匂いが立ち込めるタラセアを筆者が二〇〇三年に訪れたとき、黒曜石の露頭を簡単に見ることができた。ここでは人頭大の原石が採掘されると親族間の贈答のかたちで最初の移動が始まり、半島内では黒曜石を一品目にして、染料や種々の道具などを交換するネットワークが発達していた。黒曜石が半島の付け根までくると、

島北岸では異なった民族集団が仲買人となつて、リレー式（直線的）に、東はニューアイルランド方面、西はヴィシアズ海峡方面に交易される。黒曜石とは逆方向に種々



黒曜石の露頭（パプアニューギニア ニューブリテン島 タラセア、2003年）

の物資、東から貝ビーズ、西からは土器などが流れてくる。

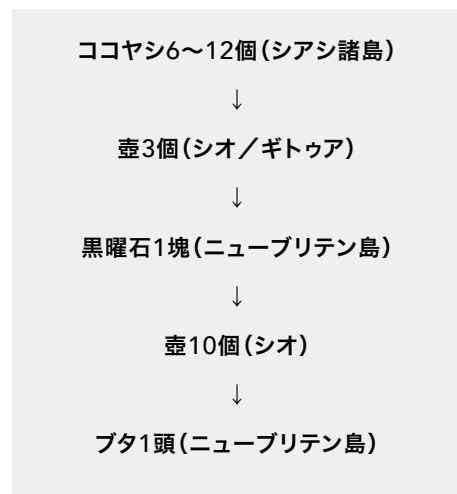
シアシ諸島民の海上交易

島西端のヴィシアズ海峡まで黒曜石が運ばれると、専門的海上交易民のシアシ諸島民がやってくる。彼らは小さな離島に住む民であり、交易用のカヌー船体を作るのに用いる木も近隣の大きな島のウンボイから交換で得ていた。しかし彼らは大型のアウトリガーカヌーを操って、この地の交易を牛耳っていた。例えばこの海峡周辺の人びとはシアシ諸島民から婚資に必要な物資を得られないと結婚もできなかった。

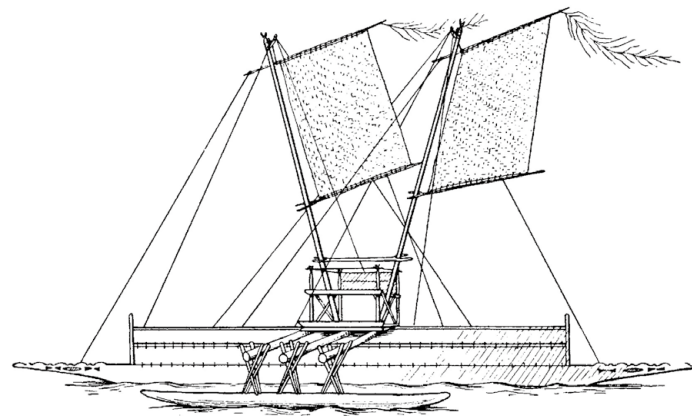
また、ニューギニア本島で言語系統の異なる集団とのあいだでは、沈黙交易がおこなわれた。それはことばを介さず、相手の持ってきた品に満足した場合は、こちらの品を置いて行くような交易である。

ココヤシが壺になり、壺が……

さて、シアシ諸島でココヤシを一二個採つたとする。それを本島の土器製作村に持って行き、壺三個と交換する。そしてそれをカヌーに積んで海峡を渡り、ニューブリテン島の西端のカリングに行く。島では土器は作らないので、カリング村の民は黒曜石の塊を差し出す。シアシ諸島民はそれを積んでまた本島に行く。本島では黒曜石は採れないので今度は壺一〇個と交換でき、それを積んで再びカリングに行く。ブター頭が差し出される。この場合、黒曜石もブタもニューブリテン島産であるが、シアシ



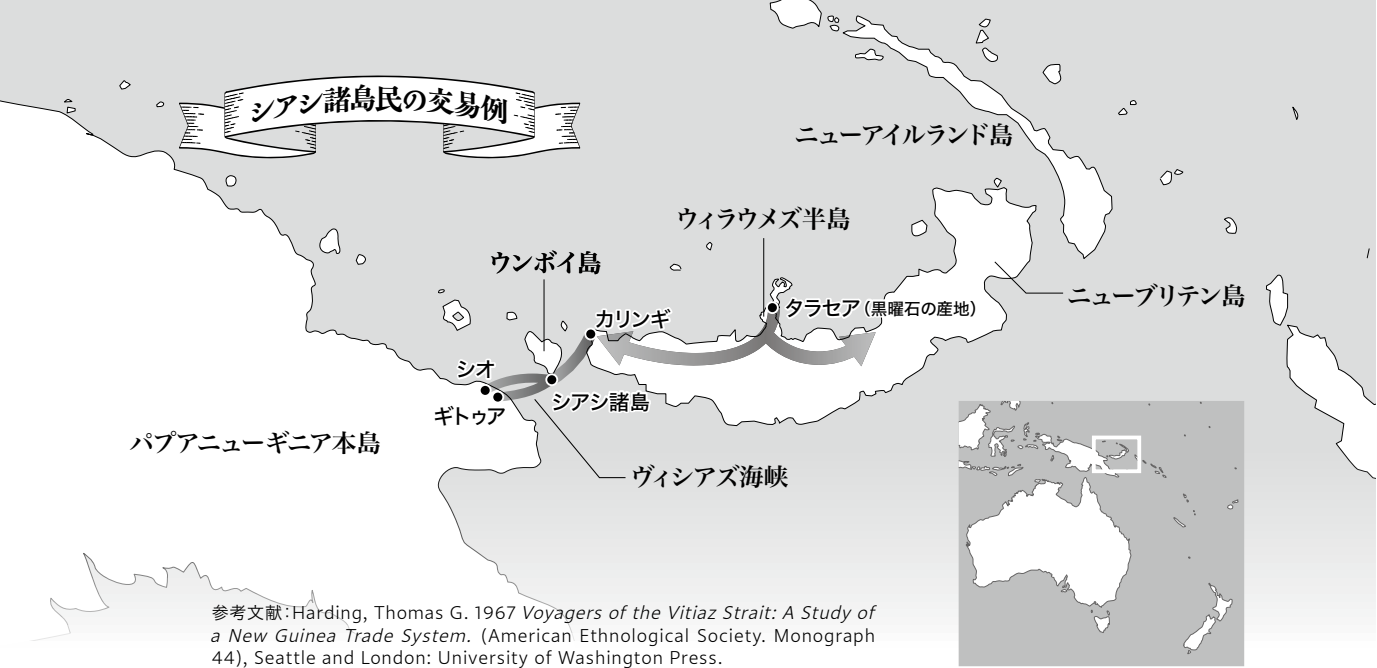
(Harding, 1967, p. 139)



シアシ諸島のカヌー
出典:Haddon, A. C. and James Hornell *Canoes of Oceania, Vol 2: The Canoes of Melanesia, Queensland, and New Guinea*. B.P. Bishop Museum, Special Publication 28 (1937) Figure 96

諸島民は結局、ココヤシから壺と黒曜石を経て、マジックのようにブタを一頭手に入れるのである。

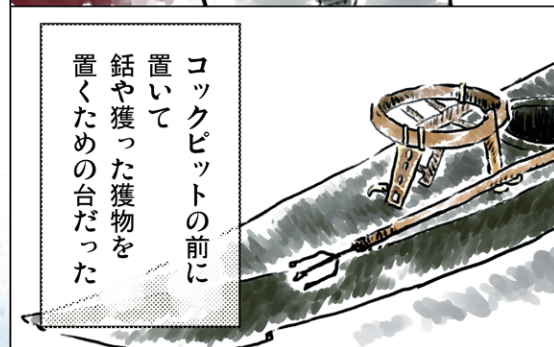
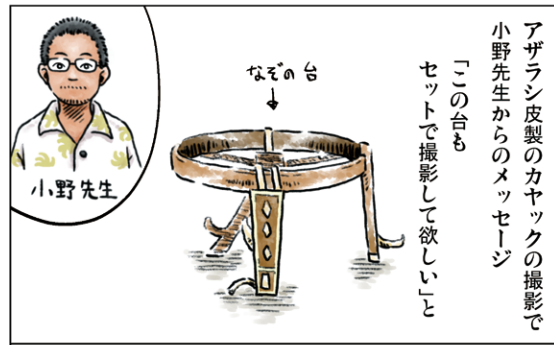
本島では海岸の土器製作村に内陸から徒歩で交易人がやってくる。彼らは内陸の産物と黒曜石を交換する。この過程で人頭ほどあった黒曜石の塊からは剥片が剥離されて次第に小さくなり、最後は一片のかけらとなつて旅の終焉を迎えるのだ。



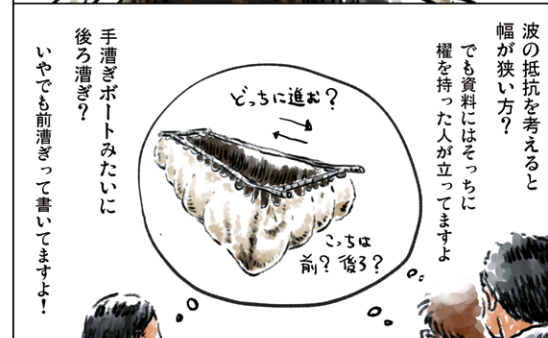
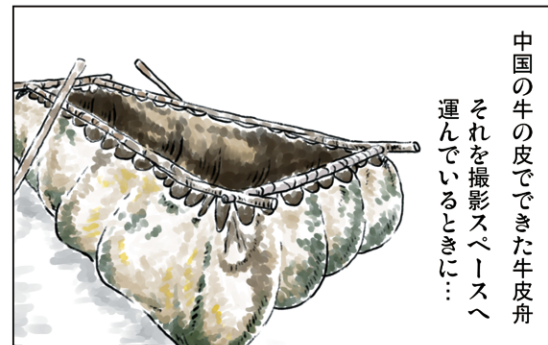
参考文献: Harding, Thomas G. 1967 *Voyagers of the Vitiaz Strait: A Study of a New Guinea Trade System*. (American Ethnological Society. Monograph 44), Seattle and London: University of Washington Press.

今回撮影したものはなんといっても舟! 大きさも形もさまざま…
そこで起こった面白エピソードをご紹介します!

小野先生が持ってきた謎の台

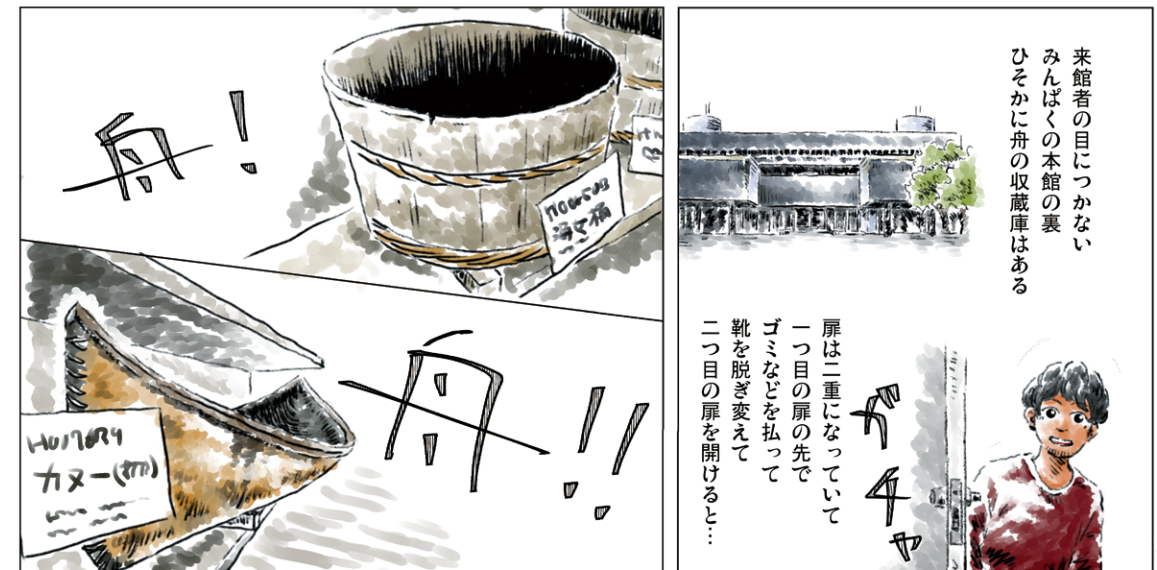


どっちが前!?



たらい舟や筏、前後同じ形のタタラ舟などでも同じ問題は起きた

牛皮舟 (中国 チベット自治区、H0202967)
アザラシ皮製カヤック (グリーンランド、H0025427)



目的は 特別展の図録に のせる舟の撮影!

② 収蔵庫内に設置した 巨大なグリーンバックに 配置して撮影する

みんなく 回覧板

イベントの詳細・予約はこちら

みんなくホームページ
催し物のご案内
<https://www.minpaku.ac.jp/event/>



各イベントについて、
詳しくはホームページを
ご覧ください。

特別展

舟と人類

——アジア・オセアニアの海の暮らし
人類史において舟やカヌーの出現と
その本格的な利用は、わたしたちホ
モ・サピエンス以降だといわれてい
ます。本特別展では人類史的な視点
もふまつつ、本館が所蔵してきた
アジアやオセアニアの海域世界にお
ける多様な舟を紹介します。
会期 9月4日(木)～12月9日(火)
会場 特別展示館



伝統の交易の海を走る
(パプアニューギニア、2011年)

関連イベント

研究公演

マオリの伝統芸能 カバハカ
日時 9月27日(土)13時30分～15時
40分(開場12時30分)

タビ・アラビア語センター長
本田孝一(アラビア書道家)
※事前申込制、先着順
※一部 アラビア語同時通訳あり
【申込期間】 9月16日(火)まで
お申し込み先
国立民族学博物館友の会
(千里文化財団)
フォーラム型人類文化アーカイブス
プロジェクトデータベース公開
1件のデータベースを館外公開しま
した。ぜひご利用ください。
「アパシスの祭り」コンパルサ
<https://m.minpaku.ac.jp/andes/>

みんなく日蘭交流国際シンポジウム
博物館の国際研修
——文化をめぐる包摂的かつ協働
的な活動の可能性
日本とオランダで実施してきた博物
館の国際研修に着目し、「研修する側」
と「研修を受ける側」の垣根を越えた
博物館の新たな連携の在り方につ
いて議論を深めます。
日時 10月4日(土)10時～16時40分
(開場9時30分)
会場 みんなくインテリジェントホー
ル(講堂)
定員 350名
言語 日英同時通訳
主催 国立民族学博物館、オランダ文
化遺産庁、オランダ王国大使館
※事前申込制、参加無料
※オンライン(ライブ配信)でもご参
加いただけます(定員500名)。
【申込期間】 9月26日(金)まで
お申し込み・お問い合わせ先
日蘭交流国際シンポジウム「博物
館の国際研修——文化をめぐる包
摂的かつ協働的な活動の可能性」
事務局 bunkazai@minpaku.ac.jp

みんなくゼミナール

会場 みんなくインテリジェントホール(講堂)
参加無料、申込不要(定員400名)

第560回
9月20日(土)13時30分～15時(開場13時)
アジア・オセアニアの舟と人類
——みんなく舟資料からの検討

講師 小野林太郎(本館 教授)
人類史における舟の出現と利用は、わた
したちホモ・サピエンスの誕生以降といわれま
す。本講演では本館の舟資料よりアジアや
オセアニアの舟と人類の歴史や共通性、地
域性について考えます。

第561回
10月18日(土)13時30分～15時(開場13時)
台湾原住民族アート史
講師 野林厚志(本館 教授)
企画展に出展している台湾の原住民族美術家
とその作品を中心に紹介します。台湾のな
かだけではなく、国際的にも知られるよう
になっている台湾原住民族アートの歴史につ
いて解説します。



企画展の内容を相談する原住民族藝術家(台湾、2025年)

みんなくウィークエンド・ サロン——研究者と話そう

本館の研究者が「みんなくの展示資料」「調
査している地域(国)の最新情報」「現在取り
組んでいる研究」についてわかりやすくお話
します。
会場 本館展示場(ナビひろば)
※定員なし(ご自由に参加いただけます)
※申込不要、要展示観覧券(一般780円、
特別展をご覧になる場合は一般1,200円)
※イベント参加費は不要

9月14日(日)14時30分～15時15分
舟の人類史
——移動・漁・信仰
話者 小野林太郎(本館 教授)
人類史において舟やカヌーの出現とその本
格的な利用は、わたしたちホモ・サピエンス
以降だといわれています。本サロンでは人
類史的な視点もふまつつ、本館が所蔵し
てきたアジアやオセアニアの海域世界にお
ける多様な舟について、展示に触れつつ紹
介します。

10月5日(日)14時30分～15時30分
古代日本の舟とその特徴
——船形埴輪と出土船材からの検討
話者 小野林太郎(本館 教授)
宮原千波(総研大 博士後期課程／
日本学術振興会 特別研究員DC1)

日本列島では、舟は人びとの暮らしに欠か
せないものでした。本サロンでは、古代の
日本列島で用いられた準構造船とよばれる
木造船について、古墳に置かれた船をかた
どった埴輪や遺跡から出土した船の破片など
の考古資料からわかったことをお話しします。

会場 みんなくインテリジェントホー
ル(講堂)
定員 400名
出演 高橋エミナ(ナ・ハワエ・フ
小杉世(大阪大学 教授)、土井
冬樹(天理大学 講師)、ピー
ター・マシウス(本館名誉教授)
司会 小野林太郎(本館 教授)
参加費 要展示観覧券(一般780円、
特別展をご覧になる場合は一
般1,200円)
※イベント参加費は不要
※事前申込制(1回につき本人を含
む2名の応募が可能)、先着順
※事前申込の方へ、当日12時30分
から本館2階会場前にて展示観覧券
を確認後、入場していただきます。
※受付期間中に定員に満たない場合
のみ当日参加を受け付けます。
【申込期間】 9月24日(水)まで
▼一般受付 9月24日(水)まで
※友の会先行受付は終了しました。
研究公演翌日にも、ナ・ハワエ・フ
によるパフォーマンスが決定しました！
日時 9月28日(日)11時15分～30分
場所 本館玄関前広場(雨天時は本
館1階エントランスホール)

ワークショップ
アウトリガーカヌー模型を
作って帆走させよう！
日時 10月11日(土)13時～15時30分
会場 本館2階第5セミナー室、
特別展示館ほか
講師 小野林太郎(本館 教授)、みん
ぱくミュージアムパートナーズ
定員 12名
【申込期間】 9月4日(木)～10月7日(火)
※事前申込制、イベント参加費は不要、
要特別展示観覧券(一般1,200円)
※詳細は二次元コード
(QR)からご確認ください。
ワークショップ
インドネシア・マドゥラ島の
舟模型を工作しよう！
日時 10月12日(日)①10時30分～13
時②14時～16時30分
会場 本館2階第5セミナー室、
特別展示館ほか
講師 小野林太郎(本館 教授)、ジャ
カルタ海洋博物館スタッフ
定員 各回15名
【申込期間】 9月4日(木)～10月7日(火)
※事前申込制、イベント参加費は不要、
要特別展示観覧券(一般1,200円)
※詳細は二次元コード
(QR)からご確認ください。
ワークショップ
エアドームによる星の航海
——オセアニアの伝統航海
日時 10月18日(土)、10月19日(日)、
12月6日(土)、12月7日(日)
①11時～12時②13時～14時
③15時～16時
会場 本館1階エントランスホール、
本館2階セミナー室
講師 小野林太郎(本館 教授)
後藤明(喜界島サンゴ礁科学
研究所/学術顧問)
定員 各回20名
※事前申込制、イベント参加費は不要

友の会

講演会・セミナーへのお申し込みは友の会ホームページ内の受付フォームをご利用ください。

お問い合わせ先 国立民族学博物館友の会(公益財団法人千里文化財団)
電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716
E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/



友の会講演会

会場：本館2階第5セミナー室(定員70名)
参加形式：会場もしくはオンライン配信
友の会会員：無料
一般(会場参加のみ)：500円
※事前申込制、先着順
※会員は会場参加の場合、事前申込不要
第564回 9月6日(土)13時30分～15時
私のアンデス研究半世紀
講師 関雄二(本館 館長)

第565回 10月4日(土)13時30分～15時
海を越えた人類の移住と舟
——海域アジア・オセアニアの事例から
講師 小野林太郎(本館 教授)
舟はいづ誕生したのでしょうか？ カヌーなど

の水域を移動する道具の本格的な利用は、
わたしたちホモ・サピエンスの出現以降とい
われています。サピエンスが、海域アジア
やオセアニアへと進出してきた背景として、人
間を乗せて水域を超えることのできる舟の存
在は重要です。本講演では、そんな舟と人
類の歴史を、みんなくが所蔵する多数の舟
資料に基づきながら紹介します。
※講演会終了後、講師とともに特別展にて
見学会をおこないます。(要会員証もしくは
要特別展示観覧券[一般1,200円])

東京講演会

友の会会員：無料、一般：500円
※事前申込制、先着順
※オンライン配信はありません。

第140回 9月28日(日)13時30分～15時
ユダヤ・ディアスポラ文化と
現代イスラエル国家
——そのねじれの深層を読み解く

講師 赤尾光春(本館 特任助教)
会場 JICA地球ひろば セミナールーム600
[JICA市ヶ谷ビル]
定員 45名
後援 JICA地球ひろば

第141回 11月2日(日)13時30分～15時
「原住民族藝術家」として
語る／語らない人びと
講師 田本はる菜(成城大学 専任講師)
会場 モンベル御徒町店4階サロン
定員 50名
協賛 株式会社モンベル

企画展
フォルモサアート
——台湾の原住民族美術の現在
フォルモサアート
台湾の原住民族美術の現在
2025.9.18～12.16
オーストロネシア系先住民族の台湾
原住民族は、口承や歌謡、衣服や道具
の造形をとおして自らの文化を伝え
てきました。その営みは現在、大地と
大海原の聲(こゑ)を聴き、森羅万象
の生命を尊び、美を解放する原住民
族アートとしても関心を集めています。
伝統の継承を重んじながら、新たな
創造の営みに取り組む芸術家たちの
作品を紹介します。
会期 9月18日(木)～12月16日(火)
会場 本館企画展示場
みんなくミュージアムパートナーズ
(MMP)のワークショップ
点字体験ワークショップ
日時 9月13日(土)、10月11日(土)
12時～15時30分(最終受付15時)
会場 本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、当日随時受付
描き書き@みんなく
——世界の衣装——
日時 9月15日(月)祝、10時30分～
15時30分(最終受付15時)
会場 本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、当日随時受付
「西アフリカのお話し会」の公演
日時 9月15日(月)祝①11時30分
～12時②13時30分～14時
会場 本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、当日随時受付

アラビア語がつかぬ
日本とアラブ世界
日時 9月21日(日)13時30分～16時
10分(開場13時)
会場 みんなくインテリジェントホー
ル(講堂)
定員 400名
【演出】
詩と語劇 大阪大学アラビア語専攻生
ウィット演奏 常味裕司(ウィット奏者)
対談 アリー・ビン・タミーム(アラブ

王母の頭像(複製)

※実物は大英博物館蔵
標本番号 | H0009676
地域 | ナイジェリア
展示場 | アフリカ



0 50mm

✦ 押しコレポイント ✦

王母像の素材に注目！ この真鍮製の馬蹄形(ばていけい)は、西アフリカの現地通貨で「マニラ」とよばれる。語源はポルトガル語(あるいはスペイン語)の「腕輪」とされ、ヨーロッパとの交易で奴隷の支払いに用いられた。



国際奴隷博物館所蔵のマニラ。サイズはさまざま(イギリス リヴァプール、2023年)



王母はささやく

いのせくみえ
井野瀬 久美恵

人間文化研究機構 監事

ベニン・ブロンズの略奪

みんなく本館展示場、ヨーロッパからアフリカへと地域が切り替わる場所に、その像はある。ベニン王国王母の頭像。わたしはここを通るたびに写真を撮りながら、「ごきげんよう」と声をかける。わたしのお気に入りのこの像は、「ベニン・ブロンズ」と総称される。

ブロンズ(主成分は銅と錫)というものの、主軸は真鍮(銅と亜鉛)の鋳物で、ロストワックス製法という独特の手法で作られた。象牙製のものを含めて王や王母、王妃の頭像が多いのは、祭政一致の王国にあって、死後もそこに魂が宿ると考えられたからだとされる。また、首都ベニン・シティの王宮を彩った多くの装飾板には精巧で緻密なレリーフが施され、王(オバ)の功績を年代記のように刻んだ。

現在のナイジェリア南西部にあったベニン王国は、13世紀ころに興り、15世紀末のポルトガルを皮切りにヨーロッパ諸国との奴隷貿易で繁栄し、16、17世紀に全盛期を迎えた。王母頭像は16世紀前半の王エシギの母イディアに始まるとされ、この頭像も現存する4つのイディア頭像のひとつ、大英博物館が所蔵するものの複製である。

1897年、イギリスは外交使節への襲撃を口実にベニン王宮を攻撃し、ベニン・ブロンズや象牙などを略奪した。イギリスに

運ばれたベニン・ブロンズは、大英博物館をはじめとする欧米の博物館へと流れた。

それから120年余りが過ぎた現在、欧米の博物館はその返還問題に揺れている。

そもそも誰のもの？

奪ったものは元の持ち主に返さねばならない。だが、話はさほど単純ではない。ベニン王国の繁栄を支えた奴隷貿易が、21世紀の今、「人道に対する罪」として厳しく弾劾されているからである。

ベニン・ブロンズの素材は、奴隷の支払いに用いられた真鍮製の現地通貨マニラ。奴隷貿易を通じて安定供給されるようになったマニラを溶かして作られた。真鍮の配合成分からは、18世紀以降、マニラの製造拠点はイギリスのバーミンガムだったことがわかっている。イギリスは他の欧米諸国に先駆けて奴隷貿易を廃止し、奴隷制度廃止運動の旗手となり、マニラの製造も中止された。だが、その後も植民地交易のなかでマニラは使われ続け、ベニン・ブロンズの生産を支え続けた。



奴隷の対価で作られたベニン・ブロンズは誰のもの？ 誰が所有するのが「正しい」のだろうか。「あなたは思う？」——今日も王母は、ヨーロッパとアフリカの狭間で、挑むようにささやく。

かつてベニン王宮を彩った真鍮製の装飾板のひとつ、みんなくが所蔵するこのレリーフ(複製)は、魚足王がモチーフとなっている(ナイジェリア、H0174737)

リゾート地の片隅で

西アフリカ文化の美術と歴史博物館 (セネガル ギロール市)

いけ べ とも き
池邊 智基 民博 助教

セネガルでの調査中、現地で働く日本人の友人らと「せっかくだからリゾート地にも行こう」と話がまとまり、休日を利用して中部のシン・サールム地方へ向かった。川沿いにマングローブ林が広がり、リゾートホテルが立ち並ぶこの一帯は、欧米人観光客に人気が高い地域である。こういう機会でもなければ調査地を離れることもない。行き先の町周辺の地図を眺めていたとき、近くの町ギロールに「西アフリカ文化の美術と歴史博物館」という施設があることがわかった。なぜこんなところにと、ふらり訪れてみた。

その中身は、地方の観光地にあるとは思えないほど充実していた。ジェンネのテラコッタやドゴンの仮面、ヨルバやダホメの彫像など、セネガルに収まらない旧フランス領西アフリカ一帯（一部旧イギリス領）の品々が所狭しと並んでいた。その展示の質は、首都ダカールの国立博物館をも凌ぐ勢いだ。館内は欧米人のツアー客で賑わっていた。

いったい誰が、なぜこんな博物館を作ったのか。帰宅後、改めて詳細を調べてみると、この博物館はフランス人美術コレクターのレジナルド・グルーが私財を投じて創設したものだ。自身のコレクションの展示案をセネガル文化大臣に送ったところ、あっさりと認可が下り、二〇一八年に開館したという。

いま欧米では、植民地時代に持ち出されたアフリカ美術品の返還が盛んに議論されている。旧フランス領のセネガルに置かれ



博物館の看板にはヨルバの仮面



マリで発掘された素焼き



西アフリカ各地の仮面や木像の数々(写真はすべてセネガル ギロール市、2023年)

たマリやブルキナファソなどの展示品も、いずれ返還を求める議論につながるのではないだろうか。グルーは自身のコラムで返還には慎重な姿勢を示しつつ、私設博物館や収集活動は「正当な手続き」で進められたことを強調し、アフリカ文化の保全と再評価に資すると主張している。その意志は確かに、この博物館に体现されていた。

とはいえ、フランス人コレクターの手で集められた西アフリカの歴史的な品々が、セネガルのリゾート地に収められているという現状を、わたしたちはどう眺めればよいのだろうか。ふらりのつもりが、難しい問いを突きつけられた。

シン・サールム地方のリゾート地ダンガンから北東のギロール市にある西アフリカ文化の美術と歴史博物館まで車で約17分。公式サイト <https://mahicao.org/>

アマゾンの長い船旅は始原に遡る

かんざき はやと
神崎隼人

大阪大学 助教

カフェオレ色の水面、ジャングルのへり、雲の漂う空、三層の景色が単調に繰り返す。南米ペルーのアマゾン川上流域での船旅での眺めだ。

船旅はナウタという街から始まった。ペルー領内でアマゾン源流のマラニョン川とウカヤリ川が合流して本流になる。ナウタはこの合流点に近く、三方面の航路の結び



繰り返す波、森、雲、高速船のモーター音
(ペルー、2019年)

目だ。出発の前日、大きなフェリーが停泊し、屈強な男たちが荷を担いで甲板とトラックを行き来していた。ジャガイモ、タマネギ、レタス、卵、ジュース、ビールといった品々が降ろされていた。甲板には五〇頭ばかりのブタとウシがひしめき合っていた。アマゾンでは、こうして人も動物も商品も船で運ばれるのだ。フェリーは次の日にはマラニョン方面へ遡るそうだ。

わたしは先住民シビボのフリオと、ウカヤリ川を遡ろうとして船着き場でチケットを買った。わたしたちの出発は夜明け前。水面からの風はまだ冷たいのに、さっきの男たちは裸で寝ている。せっかちなフリオは待ちきれなさそうだ。わたしたちの船は、「ラピド」とよばれる高速船で、モーターが二〜三台装備された、細長い一〇メートル弱のタイプだ。旅客をぎっしりシートにのせて、席の下や屋根の上に、生きたニワ



ひしめきあう高速船の船内
(ペルー、2019年)

トリから小型のバイクまで載せている。

目的地まで、ウカヤリ川の航行は二〇時間以上かかった。川はうねうねと激しく蛇行しているので、直線ではなく大回りしながら進んでいく。自然あるいは人工の細流に入ってショートカットして、朝も昼も夜中也進んでも、船旅は終わらない。延々と繰り返す景色のなかで、進んでいるのかどうかもよくわからない。そのあいだ、わたしはずっと、反復する景色を見たり寝たりして過ごした。途中で少女たちが弁当を売りに来る。

先住民の人びとの世界観では、地上、天空、水の下と、この世は何層かの円盤からなっている。そして始原の時代にカヌーに変身したアナコンダが人びとをのせて、このウカヤリ川を遡ったのだという。

だって
調査だもの

フィールドワークが始まらない？

あさだ なおき
民博助教
浅田 直規



移民局から待ちぼうけ

二〇一九年九月、わたしは東欧ルーマニアに渡った。日本人は九〇日間の短期滞在が認められているが、長期滞在許可は入国後にしか申請できない。

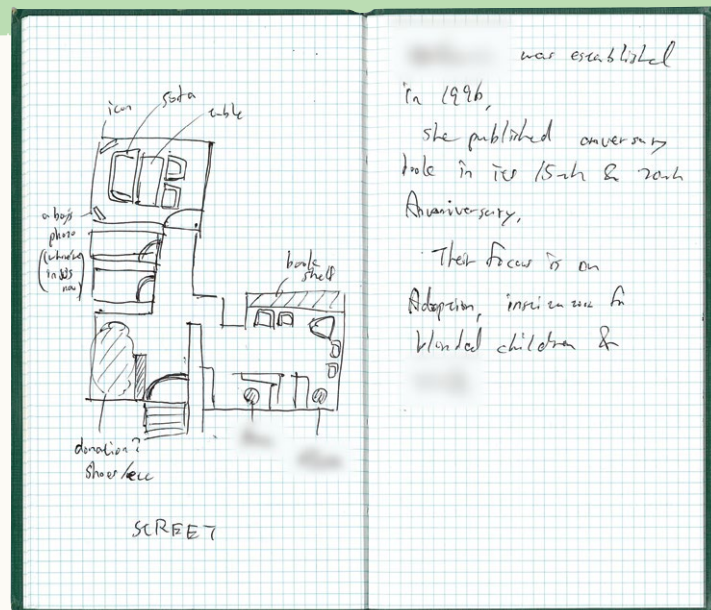
そのため、フィールドワークを始めるためには、まず長期滞在許可の取得が必要である。現地受け入れ先 NGO 代表のアナマリア（仮名）から助言を受けつつ、申請をしたのが一〇月末。朝から移民局に並んで書類は提出。あとは手続き完了の連絡を待つばかりとなった。しかし、一二月に入っても、何の連絡もない。当時のわたしはルーマニア語がほとんど話せなかったこともあり、移民局とのやりとりはアナマリアがおこなっていた。状況がどうなっているのか知りたくて何度か尋ねてみたが、「連絡はない、待つしかない」と繰り返される。そして、クリスマスが迫る一月中旬、彼女から伝えられた。「申請が却下された」と。

滞在許可の取得、失敗……

晴天の霹靂（へきれき）とはまさにこのことである。孤児（こにき）が他者と結ぶ「家族」関係の調査をおこなおうとしていたわたしは、児童養護施設で活動する

NGO や里親家庭を支援する NGO など、すでにいくつかの団体と協力関係を築き、そのプログラムにも少しずつ参加をさせてもらっていた。施設訪問への同行も内諾を得ていて、年明けから調査が本格始動するというタイミングだった。

なぜこんなことになったのか。改めて話を聞いてみると、こういうことだった。移民局から書類の不備に関する連絡があったので彼女は不備を訂正するために動いていたが、しかし、そのことを移民局に連絡して



2019年10月4日のフィールドノートより抜粋。とあるNGOの活動内容やオフィスのレイアウトに関する記録

ると書類の不備を指摘したら音沙汰なし。だから申請却下。納得のいく理由である。

そのときの感情をどう表現したらよいだろうか。怒り、失望、悲しみ、呆然（ぼうぜん）、焦燥、不安。アナマリアに対する悪感情がもつとも強かったように思うが、ショックが大きすぎてフィールドノートを付けられなかった。ので、不確かな記憶しか残っていない。

緊急避難でモルドバ共和国

だからといって立ち止まってもいいられない。とにかくルーマニアを出

なくてはならない。緊急避難ということで隣国のモルドバ共和国へ向かった。モルドバは公用語がルーマニア語であり、歴史的にも深い結びつきがある。何かの足しにはなるだろう。しかも、ルーマニアの短期滞在のルールは、任意の基準日から過去一八〇日間で九〇日滞在できるというもの。あと三カ月をモルドバで過ごせば、また戻ってこられる、かもしれない。

三カ月が経った。しかし、わたしはルーマニアに戻れなかった。審査期間中だったため適法範囲内とはい

え、ルーマニアでオーバーステイしていたことが理由だった。二〇二〇年三月一四日、失意のなか、日本への帰途についてた。

二〇二〇年八月、ルーマニアに再渡航したわたしは、アナマリアと長期滞在許可取得に改めて挑戦し、許可を得ること



当時、里親家庭で暮らしていた男の子と。夜の街で（ルーマニア ブラショブ、2019年）

もし、予定通りに滞在許可を得ていたら、児童養護施設を含む各機関の外来者受け入れ禁止期間と重複し、調査などまったくできなかつただろう。事実、施設での活動を再開できたのは、二〇二〇年二月になってからだだった。偶然ではあるが、滞在許可申請却下があつたからこそ、わたしは



二度目の申請で獲得した滞在許可証。手に取ったときの喜びといたら（ルーマニア ブラショブ、2020年）



ブラショブのクリスマスツリー。申請却下を知る直前に撮影（ルーマニア ブラショブ、2019年）



わたしを支えたチョプスイ

おおしま たかあき
大島 崇彰

東京都立大学大学院 博士後期課程

2024年、わたしはフィジー共和国ヴァヌアレブ島にある先住系フィジー人の村でフィールドワークをしていた。その滞在生活を支えたのがチョプスイとよばれる中華風野菜炒めだった。村は最寄りの街サブサブまでバスで2時間かかり、まだ電気、ガス、水道といったインフラも十分に整備されていない。一方で、山と海に囲まれた自然環境のなかで、主食のタロイモやキャッサバ、魚介類など多くの食材は自給でき、住民たちは食べ物に困ることがない生活を営んでいる。

しかし実際のわたしの食生活は栄養面や食の楽しさという点で難題を抱えていた。滞在していた高齢夫婦の家では、肉は特別なイベントのときにスーパーで買ってくる鶏肉くらいで、月に1度食卓に並べば良い方だった。また野菜は安く購入できるタマネギくらいしか食事に入っていないことも多かった。そしてさらに追い討ちをかける問題があった。村人たちには最後まで黙っていたが、じつはわたしは魚が苦手である。食卓に出されれば無理して食べていたが、1匹の半分が限度であった。

そんなわたしの栄養摂取源兼楽しみとなっていたのは、街に行った際にレストランで食べるチョプスイであった。チョプスイはそぎ切りにした鶏肉やラム肉に、ニンジン、タマネギ、ササゲ豆のようなロングビーンを炒めたもので、基本の味付けは醤油である。もともとはアメリカへ移住した中国系移民が広めた料理とされているが、今ではフィジーの多くのレストランで提供されているポピュラーな料理だ。

調査中、サブサブの街にあるほぼすべてのレストランのチョプスイを食べた。そのなかで、チョプスイの微妙な違いが見えてきた。調理人が中国系なのか、インド系なのか、先住系フィジー人なのかで、具材や味付け、お皿の使い方などがわずかに異なるのだ。例えば、中国系の店ではオイスターソースが効いてコクがあり、インド系の店では唐辛子が効いていて少し辛口であったり、パクチーが入っていたりする。先住系フィジー人が調理する店では、基本の醤油味をしっかりと効かせた仕上がりが多い。チョプスイはこうした多民族国家フィジーならではの違いを感じながら楽しめる料理でもあった。わたしの調査生活を密かに支えてくれた一皿に感謝したい。



中国系のレストランのチョプスイ。具材は鶏肉、タマネギ、ニンジン、ロングビーン。オイスターソースが香る。卓上には酢も用意されている（フィジー共和国 ヲァヌアレブ島 サブサブ、2025年）

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発行人 山中由里子
編集委員 樫永真佐夫(編集長) 河西瑛里子
黒田賢治 中川理 奈良雅史 松本雄一
制作・協力 公益財団法人 千里文化財団
印刷 株式会社 研文社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係
にお願いします。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆油由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



『月刊みんぱく』は 国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読のほか、友の会会員の方には毎月お届けします。

『月刊みんぱく』定期購読

本誌を1年間お届けいたします。年間をとおして、いつからでも始められます。



お問い合わせ

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するためにつくられました。本誌送付のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893(平日9:00~17:00)

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/



友の会

今月号の地図



編集後記

大阪市内で大川(旧淀川)を手製のペットボトルカヌーで下る人を見た。舟の形はしているが、素材のペットボトルは加工せずお互いを接着させるだけの単純な構造だから、丸太イカダにも近い。原初的な舟なのだった。

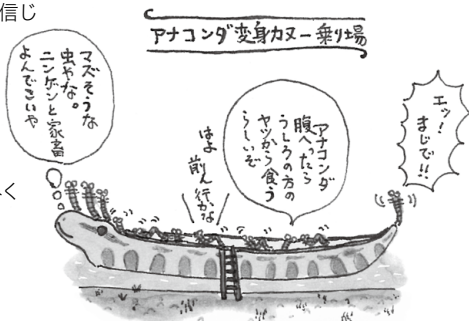
本誌 3 ページの地図を見ると、紀元前 1800 年ごろには中国南部からフィリピン群島に渡って、ヒトはすでに新天地を拓いていた。4000 年、いや、もっとむかしに水平線の彼方まで航海できるレベルに、舟をヒトは進化させていたとはびっくり! 大海に挑んだ先人の勇氣にもびっくり!

次いで神崎隼人さんの記事(17 ページ)。アマゾンで遡上した最初のヒトは、アナコンダが変身したカヌーにのったという。そのカヌーとは、自分をのみこむかもしれないアナコンダを信じ

て「板子一枚下は地獄」に挑んだ勇氣の比喩なのではなかるうか。

海、舟のロマンを感じる特別展を、ぜひお楽しみください。

(樫永真佐夫)



次号の予告 10月号

特集「無限! 台湾原住民アート」(仮)



国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151

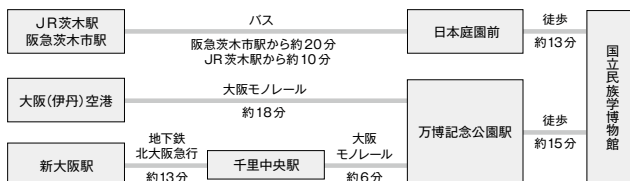
開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

休館日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は直後の平日)
年末年始(12月28日~1月4日)

観覧料 一般 780円/大学生 340円/高校生以下 無料
特別展の観覧料金は、その都度、別に定めます。
※観覧料割引についてはホームページでご確認ください。

主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>



2025年9月4日発売新刊 | ISBN: 978-4-309-22971-3

国立民族学博物館 特別展図録

『舟と人類』

—アジア・オセアニアの海の暮らし—



表紙：
ネゴンボ（スリランカ）、1988年、
撮影 門田修（海工房）

舟の出現はホモ・サピエンスの誕生以降のことだとされる。国立民族学博物館が所蔵するアジア、オセアニアの多様な舟の写真と実測図・イラストを豊富に掲載。人類史的視点から、舟とともにある海の暮らしを貴重な写真や15本の書き下ろしコラムなどで紹介する。

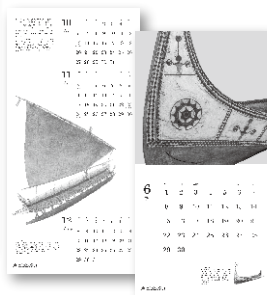
監修：国立民族学博物館

編集：小野林太郎

出版社：河出書房新社

184頁 B5変形

定価 2,970円(税込)



2026年

国立民族学博物館オリジナルカレンダー

舟と人類

アジア・オセアニアの海の暮らし

サイズ 25cm × 25cm オールカラー 28頁 中綴じ 月曜はじまり

定価 1,540円(税込)

国立民族学博物館友の会 会員価格 1,386円(税込)

◆ 5冊以上まとめてご購入の場合は、1冊1,232円(税込)です。

◆ 通信販売の場合、別途発送手数料が必要です。

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ店頭にて、特別展の会期中（2025年9月4日〔木〕～12月9日〔火〕）に、『舟と人類』の図録とオリジナルカレンダーを同時購入いただくと、オリジナルカレンダーを定価から10%割引いたします。

お問い合わせ

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ

（国立民族学博物館1階、10:00～17:00、水曜日定休）

オンラインショップ「World Wide Bazaar」

<https://www.senri-f.or.jp/shop/>

